

# 放生津潟・内川に関するお話



## 大伴家持

天平18年(746年)月に越中守に任ぜられて地方官に転じる。歌人として、百人一首かるた読み札「中納言家持」長歌・短歌など合計473首が『万葉集』に収められており、『万葉集』全体の1割を超えている。このことから家持が『万葉集』の編纂に拘わったと考えられている。

『万葉集』(まんようしゅう、萬葉集)は、7世紀後半から8世紀後半ころにかけて編まれた日本に現存する最古の和歌集。天皇、貴族から下級官人、防人などさまざまな身分の人間が詠んだ歌を4500首以上も集めたものである。

みなと風 寒く吹くらし 奈呉の江に 妻呼び交し 鶴多に

大伴家持 卷17-4017

河口の風が寒々と吹いているらしい。奈呉江で夫婦が呼び合いながら、鶴がたくさん鳴いている。

あゆの風 いたく吹くらし 奈呉の海人(あま)の  
釣する小舟 漕ぎ隠れ見ゆ

大伴家持 卷17-4018

あゆの風(越中の方言で北東風のこと)が強く吹いているらしい。奈呉の漁師たちの釣りをする小さな舟が、漕ぎ進むのが波間から見え隠れしている。

放生津地域振興会

射水市地域振興会地域提案型市民協働事業

「ふり返る未来研究会」 資料001(houjyouzu:hp)

2020年(令和2年)10月20日作成

作成: 桧物和広

Kazuhiro Himono

# 目 次

1. まえがき	p-01			
2. 放生津潟の漁業と「みなと」への成り立ち	p-02			
(1) 奈呉の浦の越の潟.	p-02			
3. 内川を湊としての漁業の発達	p-04			
(1) 漁業				
4. 海運	p-05			
(1) 放生津潟から内川海運変遷	p-05			
(2) 北前船・弁財船	p-09			
(3) 北前船の衰退	p-09			
(4) 能登通船	p-10			
(5) 北洋材の輸入	p-11			
5. 富山新港の特徴	p-12			
(1) 港口切断	p-12			
(2) 地鉄射水線及び主要地方道魚津・氷見線（堀切橋）の切断	p-13			
(3) 内川の汚れ対策	p-13			
(4) 中間資料：越の潟から富山新港年表	p-14			
(5) 富山新港開港から50周年を迎える	p-15			
(6) 放生津潟と富山新港の特徴	p-15			
(7) 恩恵と試練	p-16			
6. 富山新港・内川橋めぐり	p-19			
(1) 新湊大橋	(2) 新港大橋	(3) 二の丸橋	(4) 放生津橋	p-19
(5) 東橋	(6) 山王橋	(7) 神楽橋		p-20
(8) 中新橋	(9) 中の橋	(10) 新西橋		p-21
(11) 港橋	(12) 奈呉の浦大橋	(13) 桜橋		p-22
(14) 茂八橋	(15) 藤見橋	(16) 西橋		p-23
(17) 万葉線内川橋梁				p-23
7. 水質汚濁防止法制定（一部）	p-24			
8. 内川・富山新港周辺排水ポンプ場配置図	p-26			
9. 内川のポンプ場（排水機・流水止め）	p-28			
10. 内川流域浄化対策事業	p-31			
11. 自然災害被害（台風・波浪・洪水・雪害）	p-34			
(1) 水害の歴史	p-34			
(2) 新湊地区水害被害年表	p-36			
12. 内川と放生津城	p-38			
13. 奥の細道	p-40			
14. 新湊のむかし話	p-42			
15. まとめ	p-43			

# 放生津潟・内川のお話

## 1. まえがき：放生津潟(越の潟)

放生津潟や内川周辺は、縄文前期の海侵によってできた広い入り海であったが、東方から砂州が発達し、潟湖(せきこ)と化した。水深2メートル前後の浅い潟で、その後土砂の埋積で形成されたものと考えられています。古くは越湖(こしのうみ)と呼ばれ、かなり広い湖であったが、流入河川による土砂の堆積と干拓により縮小しました。

もともと、沿岸州といわれる形状は、海岸線とほぼ平行に、海を隔てて形成された堤防状の砂州(さす)砂州によって外海から分離されてできた海岸横の湖。これを潟湖(せきこ)と表現しています。近くでは「石川県の河北潟」があります。

砂州によって外海から隔離された海岸の湖ではありますが、浅海の砂が沿岸流などによって移動して砂州が形成され、内側が湖になる。潟は浅く、波が静かで、海と通じる口が狭いことが特徴です。古くは奈呉、放生津(ほうじょうづ)と呼ばれ、鎌倉時代の守護所、加賀藩時代の蔵宿がおかれるなど、この地方の中心であった。

天平の時代、越中国の国主大伴家持が、万葉集で奈呉(なご)の海や奈呉の浦と詠んだ潟湖(せきこ)である放生津潟は、面積概ね1.7平方キロ、周囲約6km、水深は概ね1~1.5mでありました。

内川は、流路延長わずか2.6kmで、運河(水路)と言った方がよい形で放生津潟と同様な自然の力で形成されたものと考えられます。

1964年(昭和39年)以来の富山高岡新産業都市の中核事業として掘り込みの富山新港が築港されて放生津潟は消滅しました。周辺も低湿な水郷の水田地帯でありましたが、埋め立てられて臨港工場用地となりました。



写真01：天平18(746)年、大伴家持が越中国司として赴任する奈呉の浦(想像図)

## 2. 放生津潟の漁業と「みなと」への成り立ち

### (1) 奈呉の浦の越の潟

射水市の旧新湊市街地は、「奈呉の浦」と呼ばれ古くから中央にも知られる存在で万葉集にも度々名を連ねる景勝地でした。越中国守となった大伴家持も奈呉の浦の風景に深く感銘したとされ、奈呉八幡宮(後の放生津八幡宮)を勧請しています。中世に入ると越中守護となった名越時有(なこしときあり：北条時有)が放生津城を築き、越中守護所が設けたことで中心地として発展しましたが、名越氏は元弘3年(1333年)南朝方に攻められ滅亡してしまいます。

その後、守護代となった神保氏が支配し、明応2年(1493年)には、室町幕府10代将軍足利義材が下向するなど再び脚光を浴びます。戦国時代後期に領主となった佐々成政が豊臣秀吉に敗れると前田家の所領となり江戸時代も加賀藩の藩領となります。奈呉の浦は庄川河口に位置していた為、舟運の拠点となると同時に北前船の寄港地として経済的にも発展しました。又、漁業の町として名を馳せ、市内には西宮神社や漁民義人塚など、漁業や廻船業に縁のある史跡が点在しています。

富山県射水市新湊地区。海の恵みとともに人々の暮らしが営まれてきたのはもちろんですが、海からやってくる異なる地域のものや文化、考え方を受け入れ続けてきた玄関(=「水門」)としての長い歴史があります。

大伴家持の歌にあるように、約1300年前にはすでに漁港としての形ができており、徐々に漁業や製塩、魚の加工の他に海運を生業とする集落ができ始め、約800年前には交易港としてすでに機能していました。人口と産業の集積する水際の陸地(=湊)であり、海からやってきたモノたちが内陸へと浸透して行くための船の道(=港)の始点でもありました。ここほど「みなと」という名にふさわしい地域はありませんね。

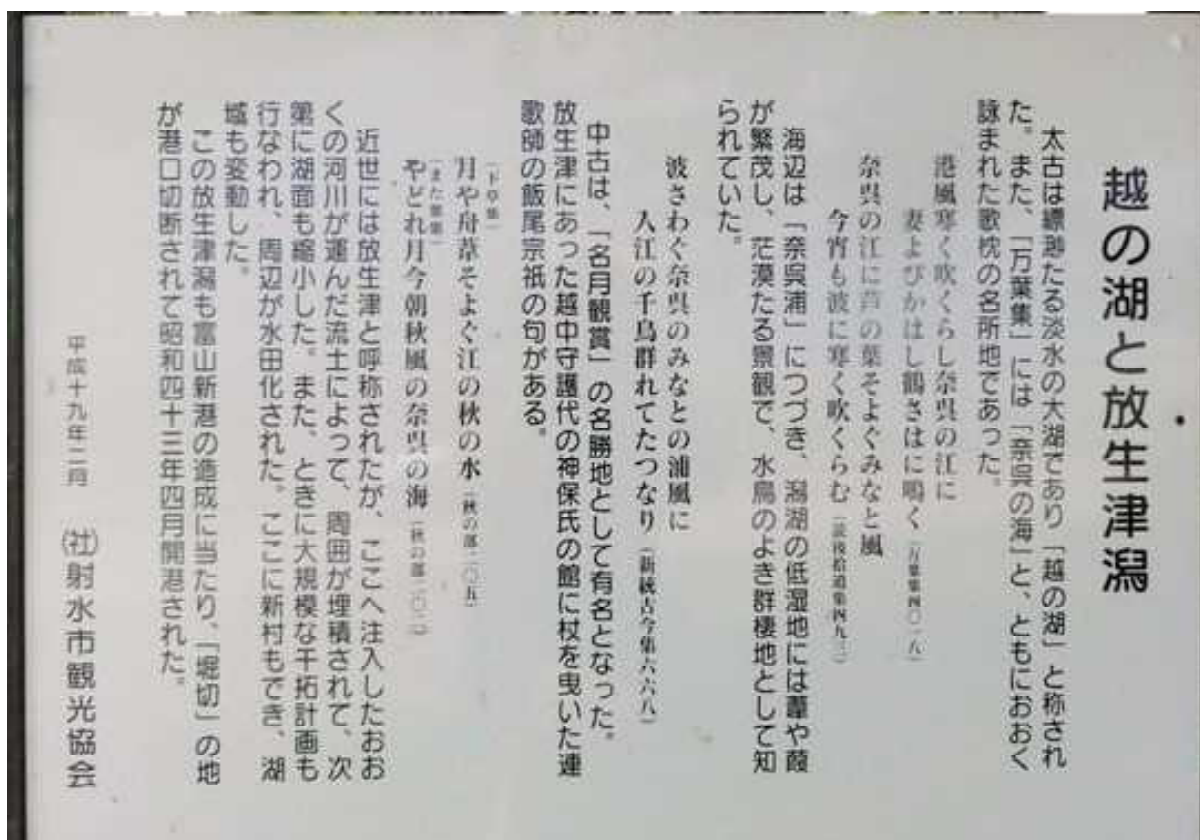


写真02：2007年(平成19年)案内板





写真04: 農業などに使用された「いくり船」

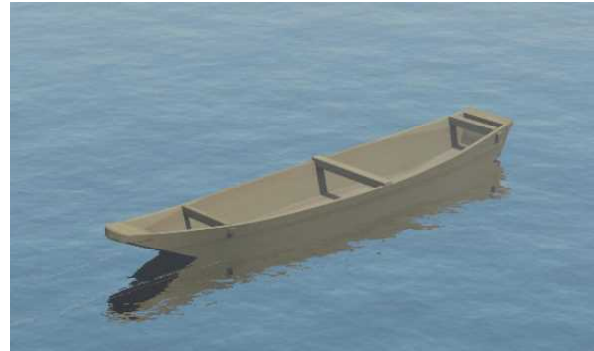


写真03: 昭和初期の弁天島・漁船  
(田植え・稲運びなどに使用された)



写真05: 江戸時代の放生津潟周辺図

### 3. 内川を湊としての漁業の発達

天然の養魚地である放生津潟では、フナ・コイ・ウナギなどが獲れました。特にシジミ漁は古代～昭和中期まで行われており、人の手によって増殖され、名物となっていました。

#### (1) 漁業

1806年(文化3年)放生津町の漁船数は、107艘(そう)で1人～2人乗り船であった(他94艘)。また、1818年(文政元年)には、漁船116艘(他76艘)と記録されている。1776年(安永7年)の記録では漁師軒数は、498軒で町全体の戸数1310軒の38%を占めた。

1786(天明6年)になると、漁師軒数

643軒と増加し、その家族3101人で内漁師としての男子数は、919人であった。

近海漁業の不漁が連続したため、遠洋漁業が盛んに。タラ・ニシン・サケ・マスなどを獲るため、漁期になると、潟周りの堀岡、明神、海老江などから漁夫が出稼ぎに行きました。

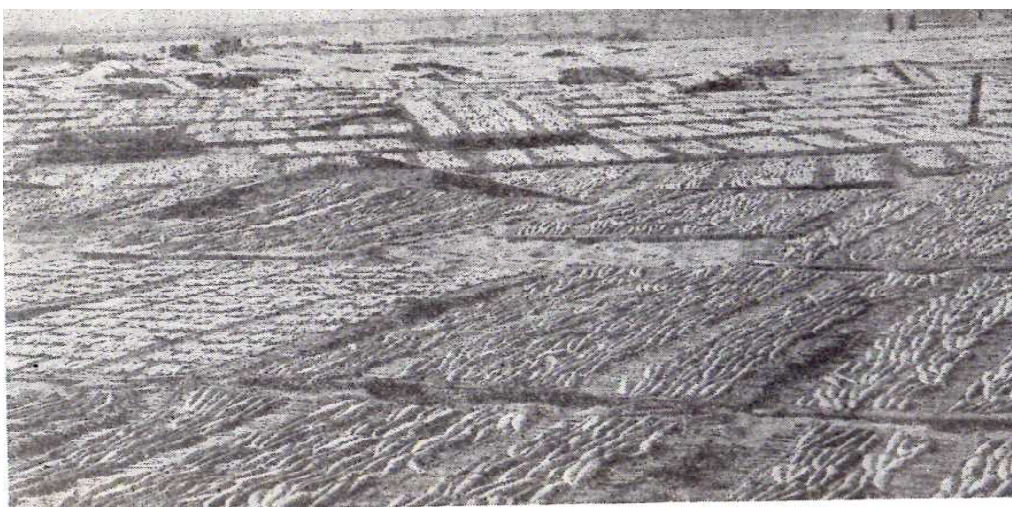
明治のはじめのころの漁法は、大敷網(おおしきあみ)・地曳網(じびきあみ)・釣など藩政時代とほとんど変わらなかった。しかし、明治34年に漁業法が出たころから、しだいに進歩し、ぶり・いわし・まぐろ等の定置網漁業が盛んになった。

その中でも氷見で発明された「上野式大敷網」が有名でたちまち全国にひろがった。県内の漁場では氷見・新湊・魚津などに多かった。

このころから漁業組合が組織され、また、網の材料が「わら」から綿糸・マニラ麻へと改められ、船の動力化・大型化が進み、これにあわせて新湊・氷見・魚津などで漁港が造成されていくのです。さらにこのころから沖合漁業へ進出するようになり、日本海での操業が増え、その上、沿岸各地や北海道以北へも出漁し、「にしん・きけ・ます漁業」などが増えていったのです。遠洋漁業としては、明治の中ごろから千島・樺太・朝鮮・北洋へと出漁し、サケ・マス・カニなどを追うようになっていきました。



写真06：昭和10年ごろの漁船



砂浜を埋める干場風景(昭和15年ごろ)

写真07：1940年(昭和15年)大量にとれた魚の干し状況(越の潟・放生津八幡宮までの砂浜)



## 4. 海運

### (1) 放生津潟から内川海運変遷

400年も続いた長い長い平安時代。それが終わればいよいよ武士の世・鎌倉時代(鎌倉幕府)となります。その期間は(1192年～1333年)あるいは(1185年～1333年)。

歴史的に大きな区分としては室町時代【1338-1573年】と合わせて「中世」となります。

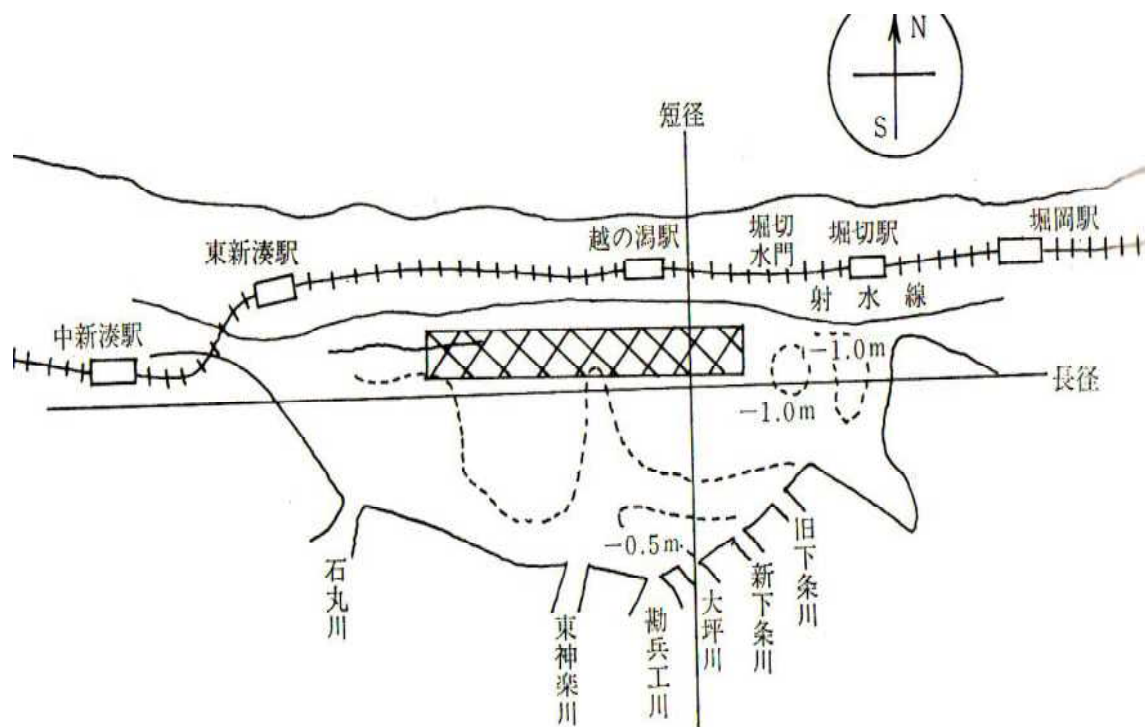


写真08: 放生津潟に注ぐ川、1967年(昭和42年)(参考図)

江戸時代には四角帆一枚で逆風帆走のできる弁財船が、日本海海運の主力となり、幕末から明治初期にかけて、放生津や六渡寺の船が越中廻船の半数を占めた黄金期でした。米や木材を始め、北海道からは昆布やニシン、瀬戸内・上方からは綿、塩、砂糖、石油などを運び、活発な商取引によって財をなした人々が多く輩出されました。放生津や六渡寺の船は、県内随一の数でした。

片口地内の鍛冶川放生津潟は、射水郡を集約した一大排水池の姿で存在し、かつては、放生津潟の東南部には美しい水郷風景が展望された。ここは、低位な強湿田地帯で、網目状に結んだ排水路に合わせて川端集落が散在していた。用排水は、鍛冶川・下条川・新堀川・大坪川・勤兵衛川・東神楽川・石丸川が放生津潟に注ぎ、東内川へも西神楽川・大石川と流れ込み、西内川へは、牧野川がそれぞれ合流し、海に注ぐところが湊口と呼ばれた。



写真09：放生津潟を取り巻く村図

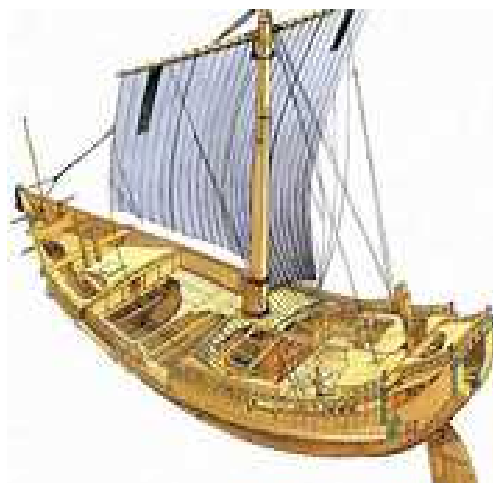




写真10： 石黒信由作 江戸時代 1803年(享和3年)ごろ

1200年～1600年代には、廻船(かいせん：津軽船)が運行されていた。

鎌倉時代後期(1200年代～)には、津軽通いの大きな船が、日本海を往来していました。十三湊(青森県五所川原市)～放生津湊～敦賀湊(福井県敦賀市)への流通ルートが開けており盛んな交易がありました。越中国司・大伴家持が奈呉の浦で釣りをする海人を歌に詠んでいます。この後、地曳網、手繰網、はえ縄、刺し網、台網(定置網)などへ発展したと考えられています。



廻船(かいせん・回船)は、港から港へ旅客や貨物を運んで回る船のこと。

中世以後に発達し、江戸時代には菱垣廻船・樽廻船のほか、西廻り航路(北前船)・東廻り航路、さらに北国廻船・尾州廻船などの浦廻船が成立して船による輸送網が発達しました。

放生津潟は、江戸時代以降、放生津潟に注ぐ河川の改修や農地の開拓が進みます。大雨のたびに水浸しになっていた潟周辺は、ほとんどが沼地。土を運び、埋め立てるのはかなりの難工事でした。そこから新たな村ができ、農地が広がり、今はさらに、富山を代表する工業地帯となっています。

時代によって鮮やかに転身を繰り返してきたこのエリア。その影には、先人たちの並々ならぬ努力があるのです。

放生津潟周辺に住む人々は、古来から半農半漁の暮らしでした。フナ、コイ、ウナギ、ナマズなどが生息する天然の養魚地であり、周辺の肥沃な湿地では稲作が行われていました。一方で、放生津潟には多くの河川が注いでいるため、大雨のたびに潟周りの民家や農地が浸水しました。

そこで、海に近い潟の境界線を人力で掘り抜き、海へ排水したのです。この場所は「堀切」と呼ばれました。ただし、排水できても安心はできません。水位が低いまま満潮を迎えると、今度は潟周りの田んぼに海水が逆流し、塩害を引き起こすのです。逆流を防ぐため、今度は土のうを積み上げて堀切を封鎖する必要がありました。

人々に恩恵と試練を与えてきた放生津潟の面影は、今の富山新港の周辺にも実はいろいろ残っているのです。江戸時代も、津軽船ルートが日本海海運のベースとなっており、放生津湊は越中を代表する拠点でした。北海道、東北との交易のほかに、越中の各湊や越後、能登、加賀などに行き来する地廻り海運も盛んで、内川や庄川など内陸の河川を使った舟運と結びついて発展しました。

(2) 北前船(きたまえぶね：弁財船(北前船))

富山の北前船は江戸中期から明治10年代にかけて活躍しました。日本海物流の拠点として、古くから海運業や漁業などで栄えた新湊。海からやってきた荷物は、小さな船に積み替えられ、内川を通過して様々な地域に運ばれました。今でも内川沿いでは古くからの倉庫群や貯木場を見ることができます。

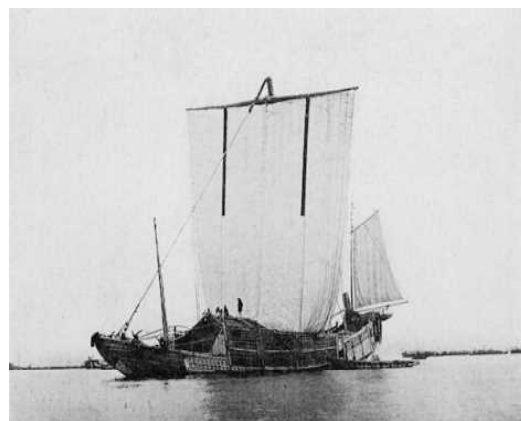


写真11：北前船 I 1690年(元禄3年)



写真12：北前船2 1690年(元禄3年)

新港として生まれ変わる以前1690年(元禄3年)放生津町の家数は、945軒であったが、1778年(安永7年)には、1310軒となり、1816年(文化13年)には「1504軒と増加し、幕末の1858年(安政5年)には、1792軒の町となり、その時の人口は、7555人でありました。

(3) 北前船の衰退

射水平野を流れる多くの河川は放生津潟に流れ込み、運河状(水路)の内川を経て日本海に注ぎ込む。江戸時代には放生津町、六渡寺村、海老江村などが北前船の拠点として栄えた。新潟県寺泊町の住吉家に残る「御客帳」には、当地に関わる廻船業者として、放生津の綿屋彦九郎など55軒と六渡寺の湊屋清三郎など45件の記録があります。

1800年代半ばの明治期に入ると、大型汽船の台頭により北前船の船賃が低落。多くの海商が北前船から手を引き、転業しました。一部の者は汽船会社を作り、さらに大規模な海運へと乗り出しまし、タンカー、旅客船等と大型化していくのです。

また、明治時代から昭和へ漁船の動力化が進みます。

昭和に入ると漁船の動力化や大型化が進みます。昭和後期にはディーゼル機関が主になりました。係留地として内川が手狭になったため、新湊漁港の整備が進められました。

1900年代に入ると、汽船の就航により、県内の港の機能は伏木港に集中。貨物取扱量が増えるにつれ、港の改善・改良を重ねましたが、港湾機能の拡大と工場用地確保のため、富山新港の造成への機運が高まります。



## (4) 能登通船

1905年(明治38年)ごろの富山湾沿岸は、汽船・西洋型帆船・和船などが入れ混じり混沌(こんとん)とした時代でありました。

長い海岸線をもつ能登には、意外に船が少なかつた。小回り船ならたくさんあったであろうが、隻数では、新湊が一番多く101隻の能登通船が活躍していたのです。

能登からの移入品 1905年(明治38年)1カ年		
品名	金額	備考
炭(すみ)	122,000	約72万票(10銭~20銭/1俵)
木材類	92,000	松・杉・あて角材・板材・タルキ
酒	42,000	7,400タル(宗玄・大江山)
魚類	30,000	
塩	6,300	
薪(まき)	6,000	60万ば(把)
竹材	6,000	
その他	4,700	石(小木)・建具・わらじ類
計	309,000	

能登地方の宇出津・門前・富来等・穴水の地域から「炭・木材などの生活物資放生津内川へ運び、放生津内川からは「砂利・砂などの建材」を運搬したのです。中でも高岡の小矢部川・千保川を利用し、鉄器の「五右衛門風呂」や日常品の銅器なども運ばれました。放生津潟は、もともと天然の貯木場として利用されてきました。そして、内川ぞいには、木材の製材工場や造船所・倉庫業・米穀店が発達したのです

能登通船の放生津地区町別在籍数/1905年(明治38年)新湊商工会会報より										
東町	1	中町	3	法土寺町	13	四日曾根町	3	中伏木町	2	
荒屋町	4	奈呉町	5	立町	5	古新町	7	三ヶ新町	1	
四十物町	4	新町	20	南立町	2	長徳寺町	10	山王町	2	
三日曾根町	15	紺屋町	2	六渡寺町	2					
									合計	101

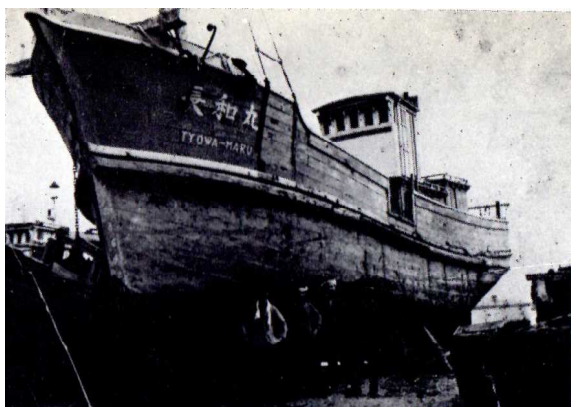


写真13：能登通船1

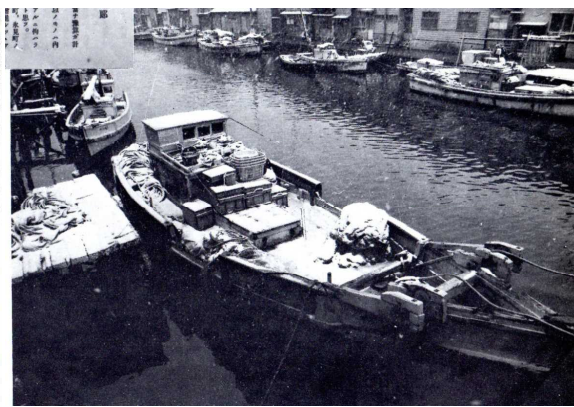


写真14：能登通船2

能登通船の日程は、内川を朝3時～4時に出発し、約5時間かけて能登の穴水港に到着し荷物をおろして、明日の荷を積んで宿泊し、明朝3時～4時に出発し内川に戻る過酷な労働であった。また、能登通船は、当時の「焼き玉エンジン」を使用した船であった。それは鑄鉄製の球殻状(きゅうかく)の燃料気化器を兼ねた燃焼室をシリンダーヘッドに持ち、焼き玉の熱によって混合気の熱面着火を起こし燃焼を行うレシプロ内燃機関の一種で焼き玉機関とも言われる。英語では“Hot bulb engine”と呼ばれ、セミ・ディーゼルと呼称する文献もある。4ストローク型も2ストローク型も存在しました。焼き玉エンジンは焼き玉内に、ディーゼルエンジンは燃焼室内に、共に霧状の燃料を噴射する。しかし、焼き玉エンジンの燃料の加圧装置はディーゼルエンジンのような精巧な噴射ポンプを用いず、それほど高圧力を発生するものではなかった。

#### (5) 北洋材の輸入

1900年代の昭和 30年代には北洋材入荷量が全国 20% を超える実績を挙げました。新港造設で新たに整備された貯木場は現在も利用されています。

115年前に漁業組合ができた堀岡地区。平成6年、近畿大学水産研究所と連携し養殖事業を行うようになったのをきっかけに、平成15年、養殖漁業をメインとした堀岡養殖漁業協同組合に改組。海や池などを囲って育てるのが一般的な養殖と違い、一貫して陸上施設で養殖が行われています。ヒラメやトラフグをはじめ、気候風土に合わせた養殖魚の開発・育成をしています。



写真15：越の潟貯木場

「東風 いたく吹くらし 奈呉の海人の 釣する小舟 漕ぎ隠る見ゆ」(大伴家持) 1300年



写真16：昭和30年代内川風景

前から、様々な船—北前船や北洋漁業船、海外からの貿易船、大型の旅客船、ヨットやボートなどを受け入れてきた“ミナト”は、海と陸の玄関役。そして、東西の文化の橋渡し役でもあります。“ミナト”は様々な人やものが行き交い、様々なエネルギーが集まってくる場所。そして異なるものたちが出会い、交ざり、新たな文化を生み出す場でもあるのです。

## 5. 富山新港の特徴

### (1) 港口切断

さらなる変貌を遂げたのは、今から 50 年前。放生津潟を掘り込み、臨海工業地帯を新設し、大型船の行き交う国際的な流通・交流の拠点として、押しも押されもしない立派な“新港、となりました。変貌の歴史を辿ってみると、挑戦と英断の連続だったことがわかります。古い歴史や文化を背負いながらも、常に変わり続けてきた“新しいみなと、のまちの面白さを、一緒に探ってみましょう。

新湊大橋の下の開港口は、今は海とつながっていますが、もともとは放生津潟の水量を調節するための堀切の場所でした。

内川は富山県射水市新湊地区の中心部を東西に流れる2級河川である。流路延長は 2.23 km、揚水機場から奈呉ノ浦までの西内川は0.76km、富山新港から奈呉ノ浦までの東内川は1.47kmである。それぞれの平均河床勾配は、西内川1/544、東内川1/1214であります。

内川の水質状況は、放生津潟が存在していた当時は、内川は潟湖(せきこ)唯一の排水路でありました。したがって現在と比べれば、内川の流が豊かでした。河岸から入り込む生活排水などは、希釈浄化されていたと考えられます。

しかし、富山新港建設のため、堀切水門が切断されて以来、流入河川の排出は、港口へと移動した結果、内川の流が停滞し悪化していったのであります。

1974年(昭和49年)～1981年(昭和56年)の調査を見ても富山県内の河川の内最も汚濁の進んでいる河川になっていたのであります。



↑ 内川の改修工事に活躍するイクリ舟。

写真17： 内川排水能力を高める為の事業／1934年(昭和9年)内川浚渫事業



## (2) 地鉄射水線及び主要地方道魚津・氷見線(堀切橋)の切断

切断によって市街地から分断される新湊市東部地域振興策についての地元の合意され、富山地方鉄道射水線及び主要地方道魚津・氷見線(堀切橋)の切断に伴う対策と補償が議論されました。

また、代替施設の建設と渡船の運航、弁天島、堀切水門、塩害防止施設、家屋移転等の補償も検討され、切断部分のガス、水道、送配電線、電話線等の補償と代替施設の建設も対象になった。

主要地方道魚津・氷見線の堀切橋の残骸(堀岡西新明神側)は、昭和42年11月23日、午前5時40分港口切断されます。

中でも地鉄射水線及び主要地方道魚津・氷見線(堀切橋)の切断に関しては、東部地区住民にとって市街地から隔絶されることになり、通勤、通学、買い物等の生活の不便はもとより、経済的、社会的、心理的にも大きく影響する重要な問題でありました。

この為、港口の切断に伴う対策として、現状に最も近い港口の架橋又はトンネル建設が強く要望され、この他の対策としては、迂回道路、渡船(県営フェリー一日123往復)の計3案が検討されました。

この3案のうち架橋及びトンネルについては建設費が膨大であるため採択されず、迂回道路と渡船の二本建の対策に決定した。

迂回道路は、総延長5800mで新港背後地をコ字型に大きく迂回し、昭和39年に完成し、渡船は、四輪車以外のオートバイ、自転車及び徒歩者を対象として、県が運行管理を行い、2隻利用での昼夜間運行で地元住民の便を図ることになったのです。



写真18：渡船場

## (3) 内川の汚れ対策

放生津潟水辺から農地開拓、塩害そして縦横につながりを生む「内川と各河川」は、住む人々に、大きな恵みと試練を与えてきました。放生津潟で淡水魚やシジミを採り、低湿地で稲作を行う、半農半漁の暮らしでしたが、大雨で水位が上がると、潟が大きな湖のように広がって、そのたびに周辺の田んぼや民家は水浸しになっていました。

1981年(昭和56年)4月より、東西内川の中でも最も河川水が停滞している、西内川へ庄川の河川水導入が始まりました。内川は、新湊市街地を流れ生活排水などの影響を極めて受けやすく、川の流速も遅く停滞性水域にあることから、汚濁から守り、生活環境の場としての清浄な河川として位置づけるには、下水道処理施設の建設が急務でありました。

その中で、単独公共下水道として1959年(昭和34年)に新湊地区の市街地で始まり、桜町下水処理場が整備され、続いて1994年(平成6年)からは神通川左岸流域下水道事業に着手し、2009年(平成21年)までに市街地の整備をほぼ終わっています。その結果は、現在流れは、緩やかではあるが清浄な水質を保った内川となっています。

## (4) 中間資料(参考)

## 越の潟から富山新港年表(主なもの)

- 天平18年(746年) : 大伴家持が越中国司として赴任する  
 文治 2年(1185年) : 放生津に越中守護所が置かれる  
 明応 2年(1493年) : 十代将軍足利義稹(義材)が放生津幕府を置く  
 元禄 2年(1689年) : 松尾芭蕉が堀切を渡り放生津に入る  
 享保10年(1725年) : 竹脇茂三郎が久々江野の新開工事を譲り受ける  
 明和 4年(1767年) : 放生津潟中央に海竜社(ガメ宮)が建立される  
 寛政 4年(1792年) : 内川争論が起こり江ざらいと堀切の定書が作られる  
 享和 3年(1803年) : 伊能忠敬が測量の旅で堀切を渡る  
 文政 4年(1821年) : 月28日の放生津大火があり、その後「湊橋」建設される  
 明治 2年(1869年) : 堀切川に初めて橋が架かる(初代堀切橋)  
 明治23年(1890年) : 南嶋間作が汽船(奈古浦丸)を購入し運輸業を開始  
 明治24年(1891年) : 堀切川に二代目の堀切橋が架かる  
 明治29年(1896年) : 堀切川に三代目の堀切橋が架かる  
 明治36年(1903年) : 堀岡漁業組合が設置される  
 明治39年(1906年) : 新湊町立甲種商船学校が設立される  
 明治42年(1909年) : ガメ宮に弁財天が合祀され少童社に改称される  
 大正 7年(1918年) : 射水郡長・南原繁が射水平野排水事業計画を建議  
 大正 9年(1920年) : 北陸汽船株式会社がウラジオストクの定期航路を開設  
 昭和 4年(1929年) : 越中鉄道 新富山～堀岡間が開通する  
 昭和 8年(1933年) : 放生津潟に水上飛行場を設置する計画が起きる  
 昭和 9年(1934年) : 庄川大洪水。潟周りが浸水する  
 昭和12年(1937年) : 堀切川に一部鉄筋コンクリートの四代目堀切橋が架かる  
 昭和32年(1957年) : 堀切川に鉄筋コンクリート製の五代目堀切橋が竣工  
 昭和36年(1961年) : 富山新港の建設が始まる  
 昭和39年(1964年) : 太閤山ニュータウンの造成工事が始まる  
 昭和40年(1965年) : 港口切断反対の監視塔が建設される  
 昭和41年(1966年) : 堀切鉄橋が切断・撤去され、射水線が折り返し運転になる  
 昭和42年(1967年) : 港口切断。港口を結ぶためフェリーボートが就航する  
 昭和43年(1968年) : 富山新港が開港  
 昭和49年(1974年) : 富山新港火力発電所一号機が運転を開始  
 昭和55年(1980年) : 富山地方鉄道射水線廃止。代替バスが運行  
 昭和61年(1986年) : 伏木富山港が特定重要港湾に指定される  
 平成 2年(1990年) : 帆船海王丸が富山新港に係留(平成6年 恒久展示確定)  
 平成 6年(1994年) : 帆船海王丸が富山新港に係留(平成6年 恒久展示確定)  
 平成13年(2001年) : 堀岡漁業協同組合水産増養殖センター竣工  
 平成14年(2002年) : 富山県新湊マリーナが完成  
 平成24年(2012年) : 新湊大橋の建設工事が始まる  
 平成27年(2015年) : 新湊大橋完成

## (5) 富山新港開港から50周年を迎える

新湊町立甲種商船学校が設立され、全国で 9 番目に設置された日本海側唯一の商船学校。1909年に県立、1967年に国立の商船高等専門学校となり、2009年には富山工業専門学校と統合。「スーパー高専」となりました。海運業界の不況などで廃校の危機が数度ありましたが、現在も新湊で唯一の高等教育機関として、優秀な船員を育てています。

越ノ潟フェリー堀岡発着場の近くには臨海実習場があり、学生たちがヨットやカッターの練習をする光景は、富山新港の風物詩ともなっています。

富山新港開港1968年(昭和43年)4月21日、記念碑除幕式を皮切りに、富山新港開港式が行われました。記念碑除幕式には、吉田実県知事、内藤友明市長を始め約 200名が参加し、その後の祝賀会には関係諸国の大使や領事ら 700名が参加する盛大なものでした。午前11時30分、開港一番に港に入ったのは、日本郵船の三河丸。さらに第十一東洋丸、萩浦丸、ソ連船アレスキー・チリコフ号が港内に入り、4船で、開港式の神事が行われました。35,000人の見物客が式を見守りました。

## (6) 放生津潟(越の潟)と富山新港の特徴

「東風 いたく吹くらし 奈呉の海人の釣する小舟 漕ぎ隠る見ゆ (大伴家持)」1300年前から、漁船・廻船・北前船・北洋漁業船、海外からの貿易船、大型の旅客船、ヨットやボートなどを受け入れてきた「ミナト」は、海と陸の玄関役。そして、東西の文化の橋渡し役でもあります。「ミナト」は、様々な人やものが行き交い、様々なエネルギーが集まってくる場所。そして異なるものたちが出会い、交ざり、新たな文化を生み出す場でもあるのです。



写真19：1968年(昭和43年)富山新港が開港前後

江戸時代以降、放生津潟に注ぐ河川の改修や農地の開拓が進みます。大雨のたびに水浸しになっていた潟周辺は、ほとんどが沼地。土を運び、埋め立てるのはかなりの難工事でした。そこから新たな村ができ、農地が広がり、今はさらに、富山を代表する工業地帯となっています。時代によって鮮やかに転身を繰り返してきたこのエリア。その影には、先人たちの並々ならぬ努力があるのです。



(7) 恩恵と試練

絶妙な水位の境目で放生津潟周辺に住む人々は、古来から半農半漁の暮らしでした。フナ、コイ、ウナギ、ナマズなどが生息する天然の養魚地であり、周辺の肥沃な湿地では稲作が行われていました。

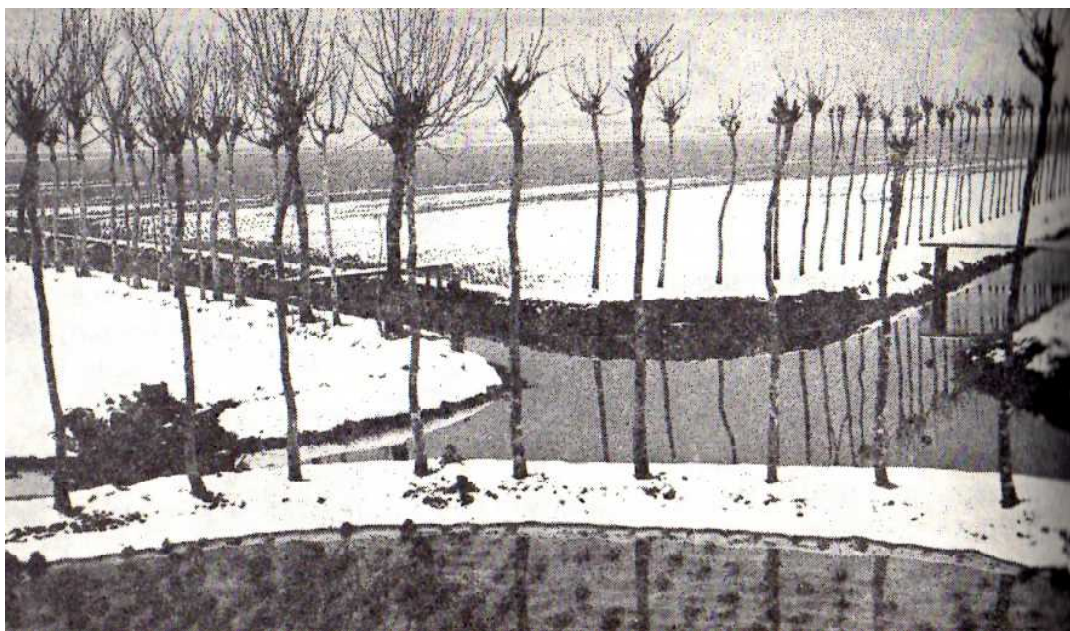


写真20：トネリコ

一方で、放生津潟には多くの河川が注いでいるため、大雨のたびに潟周りの民家や農地が浸水しました。そこで、海に近い潟の境界線を人力で掘り抜き、海へ排水したのです。この場所は「堀切」と呼ばれました。ただし、排水できても安心はできません。水位が低いまま満潮を迎えると、今度は潟周りの田んぼに海水が逆流し、塩害を引き起こすのです。逆流を防ぐため、今度は土のうを積み上げて堀切を封鎖する必要がありました。

人々に恩恵と試練を与えてきた放生津潟の面影は、今の富山新港の周辺にも実はいろいろ、残っているのです。内川は、富山新港から東西約1850メートルを結ぶ水路で、海から海へとつながる珍しい川です。



写真21：越の潟海水浴場1957年(昭和32年)



内川は射水市新湊の市街地を流れ、流路延長わずか2.6kmで、水路と言った方がよい。万葉線は庄川口、新町口、西新湊、中新湊、東新湊、海王丸が最寄り駅となる。かつて内川は、放生津潟から小矢部川に流れ込む川で、放生津潟は万葉集に「奈呉の江」と詠まれる巨大な潟湖だった。一帯は多くの川が放生津潟に流れ込む湿田地帯であり、昭和30年代まで、胸まで田んぼに浸かって田植えをしたり、米の輸送に田舟を使わなくてはならないという、農民にとっては過酷な地域だった。河川のほわりには稲架木として利用するため、トネリコの木が植えられ、水郷独特の風景をつくっていた。米をはじめとする農村からの物資が、こうした水路を通して放生津潟に運ばれ、さらに内川を通して全国に輸送された。

1964年(昭和39年)に富山・高岡新産業都市の指定を受け、乾田化が進められました。広大な射水平野の水を海に排水する排水機場が設けられ、内川の支流も上流で切断されたのです。昭和30年代の高度成長は、産業廃棄物と家庭雑排水の増大と同調し、内川の河床上昇を招いたのであります。



写真22： 越の潟・内川でのシジミ取り1955年(昭和30年ごろ)

放生津潟が富山新港として整備されたことに伴い、海面と同じ水位になってしまった。内川はほとんど流れを失ってしまった。当然のことながら川はよどみ、かつての姿を失った。水質浄化のため庄川から導水する工事が順次進められ、ようやく元のようなきれいな水を取り戻した。庄川からポンプで水を汲み上げて、西内川に流すもので西内川は逆方向に流れるようになった。浄化水路には桜橋、茂八橋、藤見橋、西橋の4つの橋が架かっている。

内川には漁船がびっしりと係留されている。家の前の船に乗って漁に行く人も多い。この地域が、能登へ行く船「能登船」や、北前船「バイ船」で栄えた時代の名残であります。

景観上の整備も順次行われている。切妻屋根を持ち、憩いの橋として整備された「東橋」、スタンドグラスが欄干にはめ込まれた「神楽橋」、巨大な手の彫刻が置かれた「山王橋」などアイデアあふれた橋が架けられている。

新湊とは廃藩置県後に合併により生れた町で、以前のこの付近の中心は放生津といった。西には庄川の河口が控え、中央から東にかけては放生津潟という潟湖を囲うような地形をなしていた。低湿地帯であり、農家は裏作ができないなど条件が厳しく、売薬などと兼業していた。

放生津は古くは越中守護所が置かれたといわれる古い歴史を持っていて、潟湖と富山湾を限る砂洲上は早くから町場化されていた。江戸初期の元禄3年(1690年)には既に945軒を擁していた。港町としても活気を帯びていて、既に元禄9年には101艘の廻船を保有していた。それらの多くは大坂回米にあたるものだったが、北前船として松前の鯨粕(にしんかす)を取引するものもあった。また能登地方との交易も盛んで、米を積出し復路には塩や木材を積荷とした。

漁港としても栄え、魚問屋も多く存在し高岡や金沢と取引されていた。

新湊市域は地図を見ると多くが港湾地帯なので、古い町並が残っているとは想像しにくい。その意外性も一つの魅力と言えます。

しかも海岸に近い区域ほど古い佇まいが残っている。かつての放生津潟から西に運河のように富山湾と通じていた内川は現在でもそのままの姿を残し、主にこの運河状の水辺より北側が古い町並だ。平入り、袖壁(そでかべ)、出格子などが町家の外観上の特徴で、間口が狭く奥行深い鰻(うなぎ)の寝床状の建て方になっている。当然ながら新しい建物も混じっているのだが、家並の連続性が高いことで町並として見映えがする。

砂洲のような狭い土地に家を建てなくてはならなかった、その苦勞が偲ばれる。

中には軽自動車ほどの幅しかない町家建築も見られます。

放生津では地藏信仰が古くから盛んで、往来の辻ごとに地藏堂があり、5・6軒で一つの地藏を囲い、守っているのだそうです。東西のメインの街路にはそれらは目立たなかったが、路地に入ると小さな祠(ほこら)をあちこちに眼にすることができる。

古い町並は内川沿いを中心として東西約1.5kmにわたり広範囲に残る。取立てて保存に値するような商家があるわけではない。しかし自然体の港町のたたずまいは雑然としているようで不思議な統一感があるようで、歩いていて面白い。



## 6. 富山新港・内川 橋めぐり

### (1) 新湊大橋

新湊大橋は、富山港と伏木港を結び広域幹線道路と連絡することによって、コンテナ貨物を中心とする物流の円滑化および効率化を図り、また、年間約80万人にのぼる海王丸パークの来訪者など、港湾利用者の利便性を向上させることを目的としています。さらに、東西の埋立地を結ぶことによって、射水市新湊地区の一体的な発展を促進し、地域の活性化を目指します。



写真23：新湊大橋

### (2) 新港大橋

高岡市と射水市を結び、海王丸パークへの連結道路に接続しています。新港大橋は市発展のシンボル「海と貿易」をテーマとして構成されています。4本の親柱には、波に浮かぶ地球がデザインされています。重要港湾伏木富山港のシンボルとなるように演出されています。



写真24：新港大橋

### (3) 二の丸橋

大正9年に完成、放生津城爾ちなんで名付けられました。その後、後昭和35年に架け替え平成19年に再度架け替えた最も新しい橋です。橋の特徴は放生津小学校の生徒によるデザインで、放生津城をイメージした高欄及び親柱で周辺環境にも適したデザインとなっています。



写真25：二の丸橋

### (4) 放生津橋

その昔、1493年越中放生津に御座(おわ)され、足利善材(よしき)政権を樹立し、放生津は政治・文化の中心として栄えていました。高欄には戦いに赴く足利善材や上京する様子を描いたパネルがはめ込まれています。また、室町幕府10代将軍足利善材のブロンズ製彫刻が親柱に設置されています。市では、史実を広く市民に知ってもらおうと橋の整備がなされました。



写真26：放生津橋

## (5) 東橋

ベンガラに塗られたこの橋は周囲の家並みにもよく調和して、平成6年度手作り郷土賞を受賞しました。「渡るだけでなく、立ち止まり、時を過ごす憩いの橋」という、独自の機能を持つ橋としてよみがえった橋であります。スペインの建築家セザール・ポルテラ氏に基本デザインを依頼し、全国でも珍しい歩行者専用の切妻屋根付き橋であります。橋の両端には、ガラス張りでベンチを備えた休憩室があり、屋根には太陽と月をかたどった風見鶏がつけられています。

行き交う漁船などを眺めることができ、日が落ちて明かりが点されると休憩室全体が大きな提灯となって浮かび上がりとてもきれいな景観を見ることができます。



写真27：東橋

## (6) 山王橋

平成2年3月に完成。橋の4箇所丸みのあるバルコニー風の半円形のアプローチをもつソフトな形状に、郷土出身の竹田光幸氏制作の大理石で作られた4基の手の彫刻。

1つ目のテーマは、「人」手はあたかも人のように、手のもつ豊かな表情を、そして生命感あふれるやさしさを表現した作品です。手とともに市の花ケイトウ、テッセンの花が刻み込まれています。2つ目のテーマは、「心」こころとの意志の強さを表現したもので、大地に置くこぶしはその力強さを表しています。

ハマグリ、カニ、巻貝が台座に刻み込まれています。3つ目のテーマは「愛」、和の心と自愛の心を表現したものです。小鳥が川面の流れを見えています。4つ目のテーマは「夢」、天を指す人差し指は希望と夢を表現しています。宇宙星座と金の星が刻まれています。そして、この橋の欄干には音符の音階がデザインされており、歩道側には童謡の「海」のメロディが、車道側には童謡の「キラキラ星」が刻まれています。



写真28：山王橋

## (7) 神楽橋

新湊市(現射水市)が「魅力あるまちづくり事業」の一環として昭和60年に完成。高欄には、地元新湊出身の工芸作家大伴二三弥氏が、新湊市の木である松や市の花ケイトウ、曳山、カモメなどが描かれた72枚のスタンドグラスがはめこまれています。

朝日や夕日の光がこのスタンドグラスを通して虹色となり、幻想的な雰囲気をもたらしてくれます。別名「虹のかけ橋」とも呼ばれています。夜になると街路灯の光と色が映す川面ののさまは格別なものがあります。



写真29：神楽橋

(8) 中新橋

まちづくり交付金で平成21年6月に歩行者専用橋として架け替えられました。中町(現在の放生津町)と新町(現在の中央町)を結ぶ橋である事からそれぞれの頭文字をとってこの名がつけられました。

橋のデザインは、江戸時代に北前船の寄港地として栄えた内川の歴史を今に伝えるべく北前船をイメージしたものであり、周囲の景観と調和するように天然の木材による外装を施してあります。



写真30：中新橋

(9) 中の橋

1650年にかけてられた橋で西橋と共に350年の歴史を持つ古い橋の一つです。この橋は、古橋と西橋の間に位置していたのでこの名がつけられました。



写真31：中の橋

(10) 新西橋

全長23m・幅10mのこの橋は平成5年に完成。内川に架かる橋では最も斬新な橋とされています。文化勲章を受章した金属造形作家・蓮田修吾郎氏がデザインしたモニュメントが施してあります。黒褐色の金属と灰色のコンクリートが実によくマッチして現代感覚となっています。高欄や橋詰めの両側にあるモニュメントは、垂直に伸びた3本の角柱が上部で巧みに連携し豊かなイメージを醸し出しています。

欄干には、2種類のパネルを交互に配置し、金属の引き締まった美しいコントラストが周囲に映えています。表面に錆が生じると焦げ茶から美しい黒褐色に変化します。生活観がたどる漁村風景の中でひと際目立った存在であります。



写真32：新西橋



(11) 湊橋

1821年3月28日の放生津大火は、瞬く間に1150戸を焼き払い、湊口に逃げた住民は橋がなかったため、48名も焼死しました。この地獄絵さながらの光景は加賀藩検視役人の同情を呼び、長さ30間(55m)、幅9.5尺(2.9m)の板橋が架けられ、俗に「おたすけ橋」と呼ぶようになりました。古新町と奈呉町を結ぶ唯一の橋となりました。

明治28年「湊橋」と改称しました。

10月1日の放生津八幡宮の秋の祭礼に、13本の曳山がこの橋を渡る様は、勇壮そのものです。

今から約400年前、この湊橋付近は、富山湾内漁業の中心地でした。内川を根拠とした天然の良港は、北前船・能登通いの基地としても機能していました。また、諸国従来の舟も停泊したり、いろいろな舟の出入りも多く、物資の交易市(いち)・魚市も盛んなところでした。



写真33：湊橋

(12) 奈呉の浦大橋

内川で最も新しい橋で、平成5年5月に架けられました。

西漁港と東漁港を結び、将来は湾岸道路にも関連していく必要な橋です。高欄には波を、親柱には新湊名物の曳山のパネルがはめこまれ、中央バルコニーには万葉の歌のパネルが装飾されています。

橋の上からの立山連峰や二上山などの眺望も格別で、まさに臨海都市新湊を代表する優美で清悍な橋です。



写真34：奈呉の浦大橋

(13) 西内川 桜橋

2013年(平成25年)架橋



写真35：桜橋

(14) 西内川 茂八橋

2011年(平成23年)架橋



写真36 : 茂八橋

(15) 西内川 藤見橋



写真37 : 藤見橋

(16) 西内川 西橋



写真38 : 西橋

(17) 万葉線内川橋梁



写真39 : 万葉線内川橋梁

## 7. 水質汚濁防止法(すいしつおだくぼうしほう)の制定(一部)

### (1) 概 略

水質汚濁防止法(すいしつおだくぼうしほう)は、公共用水域の水質汚濁の防止に関する日本の法律。法令番号は昭和45年法律第138号、1970年(昭和45年)12月25日に公布され、1971年(昭和46年)6月24日に施行された。最終改正は民法の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律(平成29年法律第45号)。

1958年(昭和33年)に制定された前身の公共用水域の水質の保全に関する法律(水質保全部)および工場排水等の規制に関する法律(工場排水規制法)は、この法律の施行に伴い廃止された。

### (2) 目 的

工場及び事業場から公共用水域に排出される水の排出及び地下に浸透する水の浸透を規制するとともに、生活排水対策の実施を推進すること等によって、公共用水域及び地下水の水質の汚濁(水質以外の水の状態が悪化することを含む。以下同じ)の防止を図り、もって国民の健康を保護するとともに生活環境を保全し、並びに工場及び事業場から排出される汚水及び廃液に関して人の健康に係る被害が生じた場合における事業者の損害賠償の責任について定めることにより、被害者の保護を図ることを目的とする(第1条)。

### (3) 常時監視

第15条は、都道府県知事は、公共用水域及び地下水の水質の汚濁の状況を常時監視しなければならない。都道府県知事は、前項の常時監視の結果を環境大臣に報告しなければならない。

### (4) 測定計画

第16条は、都道府県知事は、毎年、国の地方行政機関の長と協議して、当該都道府県の区域に属する公共用水域及び当該区域にある地下水の水質の測定に関する計画(以下「測定計画」という)を作成するものとする。測定計画には、国及び地方公共団体の行う当該公共用水域及び地下水の水質の測定について、測定すべき事項、測定の地点及び方法その他必要な事項を定めるものとする。

環境大臣は、指定水域ごとに、当該指定水域に流入する水の汚濁負荷量の総量をは握するため、測定計画の作成上都道府県知事が準拠すべき事項を指示することができる。

国及び地方公共団体は、測定計画に従って当該公共用水域及び地下水の水質の測定を行い、その結果を都道府県知事に送付するものとする。

### (5) 測定の協力

第16条の2は、地方公共団体の長は、地下水の水質の測定を行うため必要があると認めるときは、井戸の設置者に対し、地下水の水質の測定の協力を求めることができる。

### (6) 公 表

第17条は、都道府県知事は、当該都道府県の区域に属する公共用水域及び当該区域にある地下水の水質の汚濁の状況を公表しなければならない。



(7) 緊急時の措置

第18条は、都道府県知事は、当該都道府県の区域に属する公共用水域の一部の区域について、異常な濁水その他これに準ずる事由により公共用水域の水質の汚濁が著しくなり、人の健康又は生活環境に係る被害が生ずるおそれがある場合として政令で定める場合に該当する事態が発生したときは、その事態を一般に周知させるとともに、環境省令で定めるところにより、その事態が発生した当該一部の区域に排出水を排出する者に対し、期間を定めて、排出水の量の減少その他必要な措置をとるべきことを命ずることができる。

(8) 国及び地方公共団体

第14条の3は、

- ① 市町村は、生活排水の排出による公共用水域の水質の汚濁の防止を図るための必要な対策(以下「生活排水対策」という。)として、公共用水域の水質に対する生活排水による汚濁の負荷を低減するために必要な施設(以下「生活排水処理施設」という。)の整備、生活排水対策の啓発に携わる指導員の育成その他の生活排水対策に係る施策の実施に努めなければならない。
- ② 都道府県は、生活排水対策に係る広域にわたる施策の実施及び市町村がお粉流生活排水対策に係る施策の総合調整に努めなければならない。
- ③ 国は、生活排水の排出による公共用水域の水質の汚濁に関する知識の普及を図るとともに、地方公共団体がお粉流生活排水対策に係る施策を推進するために必要な技術上及び財政上の援助に努めなければならない。

(9) 国民の責務

第14条の4は、何人も、公共用水域の水質の保全を図るため、調理くず、廃食用油等の処理、潜在の使用等を適正に行うよう心がけるとともに、国又は地方公共団体による生活排水対策の実施に協力しなければならない。

内川は3カ所(庄川・日本海)海とつながっています。内川が汚れば海も汚れることは、当然です。内川周辺をきれいに清掃活動することは、きれいな川・海・魚・鳥など自分達の環境を守ることの第1歩なのです。

放生津小学校の皆さんの清掃活動は素晴らしい行為であると思います。

## 8. 内川・富山新港周辺排水ポンプ場配置図

(1) 国営射水平野土地改良事業(昭和38年度～昭和51年度)



写真40：排水図

大きな川の両岸には堤防があり、小さな川が流れ込む堤防の場所には水門が付いています。通常水門は開いていて小さな川の水は大きな川に流れ込みます。

しかし、大雨が降ると、大きな川の水位がどんどん上がって行くので、水門を開けっ放しにしておくとそこから水が逆流して小さな川の近傍が洪水になります。そこで、小さな川の水位より大きな川の水位の方が高くなる時は水門を閉めます。

しかし閉めたただけだと、小さな川の水の行き場が無くなってそこで洪水を起こしてしまうので、水門の側にポンプ場を設け、ポンプで小さな川の水を大きな川に流し込むのです。こういうポンプ場のことを排水機場といいます。現在、排水機場は、海老江・本江地区にも稼働しています。



写真41：中央排水機場



写真42：海老江排水機場



写真43：東部排水機場



西部排水機場

写真44：西部排水機場

国営東部排水機場は、1963年(昭和38年)から始められた国営射水平野農業水利事業は、射水平野5,286ヘクタールの用排水を分離し、湿田を乾田化する大事業であります。



## 9. 内川のポンプ場(排水機・流水止め)

### (1) 荒屋ポンプ場



写真45：荒屋ポンプ場 1



写真46：荒屋ポンプ場 2

### (2) 内川浄化排水機場



写真47：内川浄化排水機場 1



写真48：内川浄化排水機場 2

揚水機場は、一級河川庄川の流水の内川への導水調整をその用途とする。  
1981年(昭和56年5月1日)

※操作日：日曜日、国民の祝日に関する法律  
(昭和23年法律第178号)に規定する休日、  
1月2日及び同月3日並びに12月29日から同月31日まで以外の日

※操作時間：午前9時から午後5時まで  
(土曜日にあっては、午前9時から正午まで)

(3) 神楽川水門排水口



写真49：神楽川水門排水口 1



写真50：神楽川水門排水口 2

(4) 二の丸排水ポンプ水門施設



写真51：二の丸排水ポンプ水門施設 1



写真52：二の丸排水ポンプ水門施設 2



写真53：二の丸排水ポンプ水門施設 3

(5) 旧桜町下水処理場：四日曾根雨水ポンプ場(1974年／昭和49年)

これまでは、放生津地区の下水処理場であったが、神通川左岸下水道処理施設が完成してからは、雨水ポンプ処理施設として稼働している。  
西神楽川への排水設備として稼働している。



写真54：旧桜町下水処理場

(6) 神通川左岸浄化センター(1993年／平成5年)



写真55：神通川左岸浄化センター

海洋文化都市・射水市の富山新港東埋立地に建設された神通川左岸浄化センターは、射水・富山・婦負地方の生活環境の向上と富山湾、神通川、富山新港などの公共用水域の水質保全を目的とした神通川左岸流域下水道の要となる施設です。各市町村から集められた生活排水や工場排水などの下水は、微生物の働きを利用した標準活性汚泥法及び嫌気無酸素好気法(高度処理)により浄化されます。

処理水は、せせらぎ水路や公園池の修景用水として活用されます。また、下水処理の過程で発生する汚泥は、熔融処理(1,350℃の高温処理)され、ガラス状のスラグとして、建設資材やコンクリート製品などに有効利用されます。すなわち、汚泥は完全に無害化されています。夏には40℃を超える過酷な現場となります。普段はあまり意識する事のない下水ですが、水道の水を作るのとおなじように毎日休む事無くこの作業は続けられています。



## 10. 内川流域浄化対策事業 (内川流域浄化施設：揚水機場・ポンプ施設)

担当部署－国土交通省北陸地方整備局／富山県土木部河川課

(1992年／平成4年～1997年／平成9年)

### (1) 事業目的

内川は、庄川右岸の河口部に位置し、新湊市市街地を東西に流れる流路2.5kmの二級河川で上牧野川、牧野川、前田川、田町川、大石川、西神楽川などの6つの準用河川を持ちます。かつて、内川は、放生津潟をへて奈呉の浦、庄川に注いでいたことから、水量・流速とも豊かな河川でした。しかし、1967年(昭和42年)より着工された乾田化事業により、排水路は分断され支川流量、極端に減少し、上流域に位置する放生津潟が富山新港として、1968年(昭和43年)に整備されたのに伴い、流水は直接日本海へ排出されるようになり、内川及び支川の流れはほとんどなくなりました。

また、市街地から排出される生活排水や工場からの汚水などにより、日本海特有の変化の少ない潮汐(ちょうせき)と相まって1965年(昭和40年)代には停滞河川となった内川の水質汚濁は、著しく進み、特に夏期には悪臭が漂う状況でした。

水質改善を目的に、1980年(昭和55年)には庄川本川から浄化用水として毎秒2.2トンを導入する「内川浄化対策事業」が実施され、結果として西内川の水質は改善されましたが、導水の及ばない支川・東内川の水質は依然として悪化が見られ、沿川の住民からも水質改善が強く望まれてきました。



写真56：ポンプ整備

### (2) 事業の経緯

1991年(平成33年)には新規施策として「準用河川浄化事業」が創設されて、1992年(平成4年)より内川流域全体の水質改善と流勢復元を図り、清冽(せいれつ)な内川を取り戻すため、庄川本川から毎秒2トンの浄化用水を導入し、導水管を経て6支川に分流する「内川流域浄化対策事業」に着手しました。事業としては、取水ポンプ場・幹線導水路は、国で行い、準用河川への導水管・水路改修・浚渫工事などは富山県が実施し、1998年(平成10年)から導水開始をおこなっています。



写真57：庄川取水状況



内川流域浄化揚水機場取水樋管

操作時間は、午前9時から午後5時まで(土曜日にあつては、午前9時から正午まで)

6支川：牧野川排水区／  
上牧野川排水区／  
前田川排水区(本町 1丁目)／  
田町川排水区(本町 3 丁目) ／  
大石川排水区 (三日曾根)／  
神楽川排水区／

(昭和56年5月1日富山県告示第429号)

また、富山県立大学では、2011年(平成23年)「海水と浄化用水が複雑に交錯(こうさく)する内川の水環境に関する基礎的研究」

([https://www.jstage.jst.go.jp/article/jscejhe/67/4/67\\_4\\_I\\_1663/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jscejhe/67/4/67_4_I_1663/_pdf))

調査報告書が出されています。

「調査期間中、内川全域で海水性魚類の稚仔魚が多く観察された。」

これは、富山湾に生息する魚類が内川において、陸上由来の資源を利用していることを意味する。とし、今後の課題として、「抜本的な水環境改善には流域支川の水質向上が必要不可欠だが、河川流量や流速を増加させることが現状で最優先されるべきだと考えられる。そのため、現在、潮汐を考慮した浄化揚水機場の操作ルールの変更に伴う水環境改善効果について研究を進めている。」と報告しています。

今後の研究成果を期待します。

(3) 東西内川6河川全体図



写真58： 庄川・市川と6支川図

内川は、2級河川であり流路延長2.23kmであり、西内川の庄川揚水機場～湊口まで0.76kmあり、東内川は、湊口～富山新港までは、1.47kmあります。

現在の内川支川は、目で確認できる支川もありますが、神楽川・前田川・田町川など暗渠化(あんきょうか)され、地図上から消えてきています。皆さんの生活道路の地下に川が流れていることを知るべきだと思います。

なぜならば、海の水位が上昇したり、大雨が降って氾濫(はんらん)したりするからです。

各施設は、監視カメラや計器によって日夜制御されているのです。



写真59： 揚水機場制御盤



写真60： 導水管敷設状況



## 11. 自然災害被害(台風・波浪・洪水・雪害)

### (1) 水害の歴史(抜粋)

庄川流域は、梅雨、台風、冬季の降雪と年間を通じて降水量が豊富で、過去の庄川流域における洪水の多くは、台風に起因するものです。庄川流域において発生した洪水は江戸時代だけでも数十回記録され、明治時代でも30回を数え、昭和以降も、昭和9年、34年、39年、50年、51年、56年、58年、平成16年と頻繁に発生しています。

#### ① 1934年(昭和9年)洪水

昭和9年7月洪水は、10日夜半よりの降雨は、庄川上流岐阜山岳地帯において未曾有の豪雨となり、11日に最高水位13.10m、最大流量3,361 m<sup>3</sup>/sを記録し、浅井村(現射水市浅井地区)で堤防が決壊し、射水郡(現射水市)の大半は大湖と化し、死者20名、負傷者240名、流失家屋94棟、民家破損5,418棟、浸水家屋4,009棟、田畑冠水(田3,986ha、畑182 ha)のおびただしい被害をもたらしました。

#### ② 1976年(昭和51年)台風17号

1976年(昭和51年)台風17号による洪水で戦後最大(当時)のピーク流量を記録。この出水により、加越能鉄道庄川橋梁が落橋したほか、流失家屋8棟、浸水家屋42棟、農地・宅地の浸水11haの被害をもたらしました。

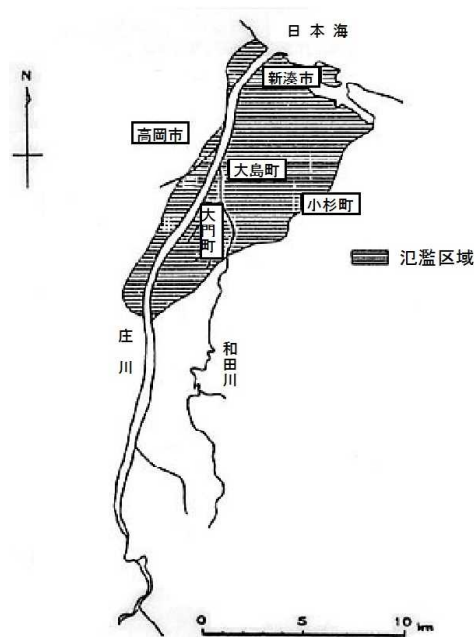


写真61：昭和9年水害氾濫地域



写真62：1976年(昭和51年)9月洪水



写真63：昭和9年水害：北陸本線の越水

## ③ 2004年(平成16年)台風23号

平成16年台風第23号(アジア名:トカゲ / Tokage)は、2004年(平成16年)10月に発生し、日本列島に上陸し大きな被害をもたらした台風である。被害状況は、大雨による河川氾濫、土砂災害や暴風、高波などにより、全国で98人の死者・行方不明者が出た。

これは、平成の台風被害では平成23年台風第12号と並んで最多であり(平成30年台風第7号が引き起こした西日本豪雨の死者・行方不明者を除いて)、当時の社会に大きな傷を残した。また負傷者555人(うち重傷者123人)、住宅の全壊909棟、半壊7776棟、一部破損1万0955棟、床上浸水1万4323棟、床下浸水4万1132棟の被害が発生した。

新湊市(現・射水市)の海王丸パークへ向かっていた航海訓練中の海王丸(II世)が台風接近のため富山港沖に投錨停泊していたところ、強い台風北風(海風)と高波によって航行不能となり、富山港に隣接する漁港防波堤の消波ブロックに衝突・座礁し、167人が救助された。この他にも、伏木万葉埠頭(外港)に接岸していたロシア船籍の貨客船が浸水横転したり、係留中の漁船の転覆・損傷が県内各地で相次いだ。

また、県内の2校の小学校の体育館の屋根が風で吹き飛ばされた。そのうち1校は同年3月にも同じ被害にあっている。神通川流域の用水が逆流し、富山市五福地区を中心に約400棟が床上・床下浸水した。

台風23号による洪水で、大門地点において観測史上最大の流量:3,396m<sup>3</sup>/sを記録し、高岡市、新湊市(現射水市)で初の避難勧告が発令されました。

この被害を受けて、庄川堤防のかさ上げや内川の支川への流入ストッパー装置等の整備がなされた。



写真64: 1976年(昭和51年)9月洪水時路



写真65: 避難所に集まった住民



写真66: 庄川グランド冠水状況



写真67: 庄川堤防護岸欠壊及び根固流出

(2) 新湊地区水害被害年表 I

水害発生日時	災害名	被害状況
1896年(明治29年) 08月02日	洪水	新湊で高波と庄川からの出水により川口堤防決壊。内川付近では浸水家屋1,036戸、浸水、農地144ha、波所堤破損540m。 
1899年(明治32年) 09月05日	洪水	台風による下条川の洪水で小杉の72戸が浸水。新湊では1,719戸が浸水。大門では浅井地内の堤防決壊。田畑30町歩に被害庄川・大門川が出水し田畑の被害多数。
1921年(大正10年) 03月26日	波浪	新湊で漁船25隻、乗組員150名が行方不明。
1923年(大正12年) 12月19日	波浪	新湊で波浪により浸水20戸。沿岸堤防決壊16箇所135m、亀裂8箇所360m。
1932年(昭和07年) 02月12日	波浪	新湊の海老江海岸で沿岸堤防を乗り越え270mにわたって決壊。人家破損2戸、浸水家屋60戸。
1934年(昭和09年) 07月11日	洪水	飛騨地方で未曾有の豪雨が発生。庄川下流で急激に増水したため、広上地内の堤防が5箇所、130mにわたって決壊。射水平野は湖のようになった。現市域の被害は死者20名、負傷者240名、流失家屋94戸、家屋破損5,418戸、浸水家屋4,009戸。庄川の最高水位13.1m。
1935年(昭和10年) 11月11日	波浪	新湊において、富山湾の寄り回り波のため負傷2名、家屋全壊20戸、半壊30戸、浸水100戸。
1948年(昭和23年) 07月25日	波浪	アレン台風の余波を受け、新湊では高波のため8棟が半壊、非住宅4棟破壊、約1,500戸が床下浸水、船舶流失22隻、護岸堤の亀裂10箇所等。
1952年(昭和27年) 11月29日	波浪	高波のため新湊では家屋浸水等の被害発生。
1963年(昭和38年) (1月～3月)	雪害	昭和38年豪雪。3mを超える積雪により各地で大被害発生。新湊では家屋全壊31戸、床下浸水400戸、その他の大きな損害。
1963(昭和38年) 09月26日	台風	台風第15号により、県西部の各河川は危険水位を突破し、新湊では15mの高波により民家61戸が全半壊、石油の大タンクも倒壊するなどの被害発生
1981年(昭和56年) (1月)	雪害	昭和56年豪雪により各地で被害発生。新湊では水道管の破裂による浸水や除雪によるガスホースの破損によるガス爆発も発生。
1993年(平成05年) 02月07日	地震	能登半島沖地震により市内で震度4を観測




新湊地区水害被害年表Ⅱ

水害発生日時	災害名	被害状況
1995年(平成07年) 01月17日	地震	阪神大震災により市内で震度3を観測
2002年(平成14年) 07月14日	水害	大雨のため新湊で5棟、小杉で1棟が床下浸水。
2004年(平成16年) 07月25日	水害	大雨のため新湊で床下浸水7棟。
2004年(平成16年) 08月19日 ～ 09月08日	水害	台風第15号及び第18号通過後の異常潮位の発生により8月19日から、新湊で断続的に道路冠水が発生(8月20、21、26、27日、9月1、8日)。8月20日には4町内で床下浸水59戸の被害が発生する。
2004年(平成16年) 10月18日 ～ 10月21日	台風	台風第23号により、市域各地で樹木倒木や建物損壊等の被害が発生。 新湊、大門では庄川の危険水位を超えたため避難勧告を発令。また、農作物被害、新湊漁港内の流木散乱。新湊で負傷者3名 内川の水位が90cm上昇し、中新湊・二の丸地内の浸水内川歩道周辺が浸水する。内川に注ぐ側溝は、内川の水が逆流し、中新湊地内では側溝水溜めから約40cm噴水した。




写真68：2004年(平成16年) 高潮で浸水した内川沿い＝10月20日、山王町内川地内


## 12. 内川と放生津城



室町幕府10代将軍  
足利義満(義材) 像  
京都府 等持院 藏



越中守護代  
神保長誠 像  
富山県 本覚寺 藏



室町幕府管領  
細川政元 像  
京都府 龍安寺 藏

**射水市 指定文化財(史跡) 放生津城跡**

放生津城は、放生津潟(現在の富山新港)の西側にあった平城である。南北朝時代の軍記物語『太平記』には、元弘三年(一一三三)鎌倉幕府滅亡に際し、越中守護の名越時有が一族とともに放生津の城で最期を遂げたと記している。室町時代には、越中守護畠山氏の重臣で、射水郡・婦負郡の守護代である神保氏の居城となった。

明応二年(一四九三)、室町幕府十代将軍足利義材(義尹・義隆)が京都の政変を避けて越中に逃れた。義材は放生津城主神保長誠に支えられて放生津に幕府政権を樹立し、京都の幕府重臣細川政元と対峙した。

義材のもとへ、公家、大名が出仕し、禪僧、歌人ら多くの文化人も訪れた。かくして、放生津は北陸の政治・経済・文化の中心地として栄えた。

永正十七年(一五二〇)、神保長誠の子慶宗が越後守護代長尾為景(上杉謙信の父)の侵略を受けて自害した。このため、神保氏は拠点を富山城に移した。安土・桃山時代には、加賀前田氏の武將が入り、江戸時代の初め頃までに廃城となった。江戸時代後期には加賀藩の蔵屋敷となり、明治時代になって新湊高等学校(現在の放生津小学校)校舎が建てられた。

江戸時代の記録によると、城は本丸・二ノ丸からなり、本丸は南北約一二六メートル、東西約八一メートル、二ノ丸は南北約五〇メートル、東西約三六メートルの大きさだった。現在、城の遺構はすべて地中に埋もれているが、昭和六三年、平成元年、平成三年に行なった試掘調査の結果、南北朝・戦国時代の遺構や青磁・白磁土師器皿・珠洲焼・越前焼・漆器碗・中国銭などが、見つかっている。

平成十五年 市の文化財に指定した。

射水市教育委員会

写真69：案内板

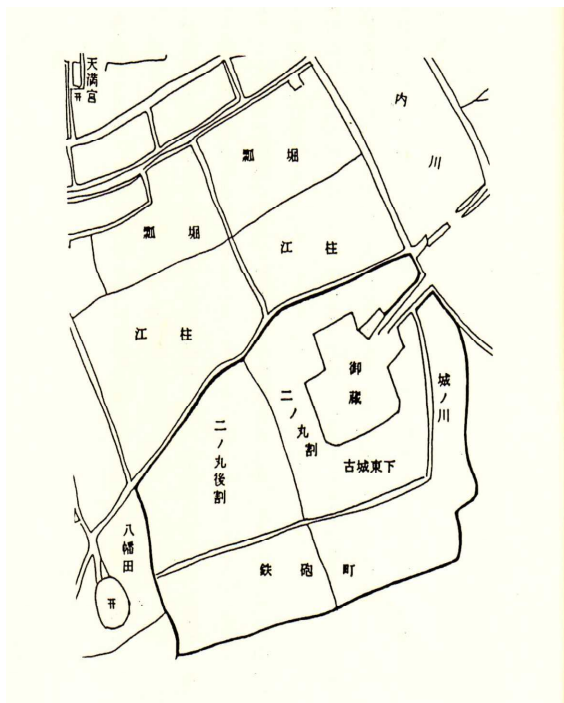


写真70：柴家の放生津城総絵図

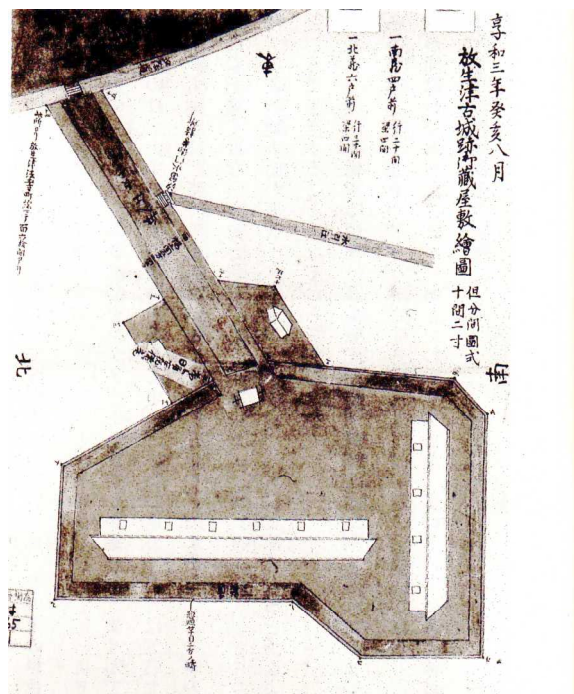


写真71：1801年(享和3年)蔵屋敷絵図



新湊市教育委員会では、1988年(昭和63年)／1989年(平成元年)／1991年(平成3年)の3回にわたり放生津城城の発掘調査を進めてきました。

城郭に関わる様々な物が発見されました。放生津城城跡は、富山県が1972年(昭和47年)に策定した「富山県遺跡地図」に埋蔵文化財として掲載されています。柴家の絵図では東側に「城ノ川」との位置と調査結果と重なることがわかり、放生津城の堀のなごりをとどめています。もちろん、城ノ川への導水は内川からですが、運河を利用した城といえます。武家屋敷絵図では、「放生津内川」と表現されています。

加賀前田藩の米蔵屋敷として船での運搬に内川が使われていたことがわかります。また、この放生津地内の最も弱点とされてきた、低湿地帯の解消に一番標高の高い「倉屋敷町」に米倉屋敷を置いたことからの町名であろうと想像できます。1585年(天正13年)前田利家の武将「奥村永福」が放生津城を守って以来、1868年の明治まで前田家が治めました。その中で、1596年(文禄5年)放生津に「檜物師・鋳物師」が存在し、牧野地区の「金屋」の地名はそのなごりではないかと思えます。また今回の調査でも「檜の曲げ物・鋳型・鉄かすが周辺に散乱していました。

1670年(寛文10年)「加越能古跡」書物に掲載されている、城の大きさは、南北126m／東西81m／高さ約3m／二ノ郭(くるわ)は、南北50.4m／東西36mです。堀は、西南幅18m／北東は、大川(内川)が堀の役目を果たしていたと思われる。

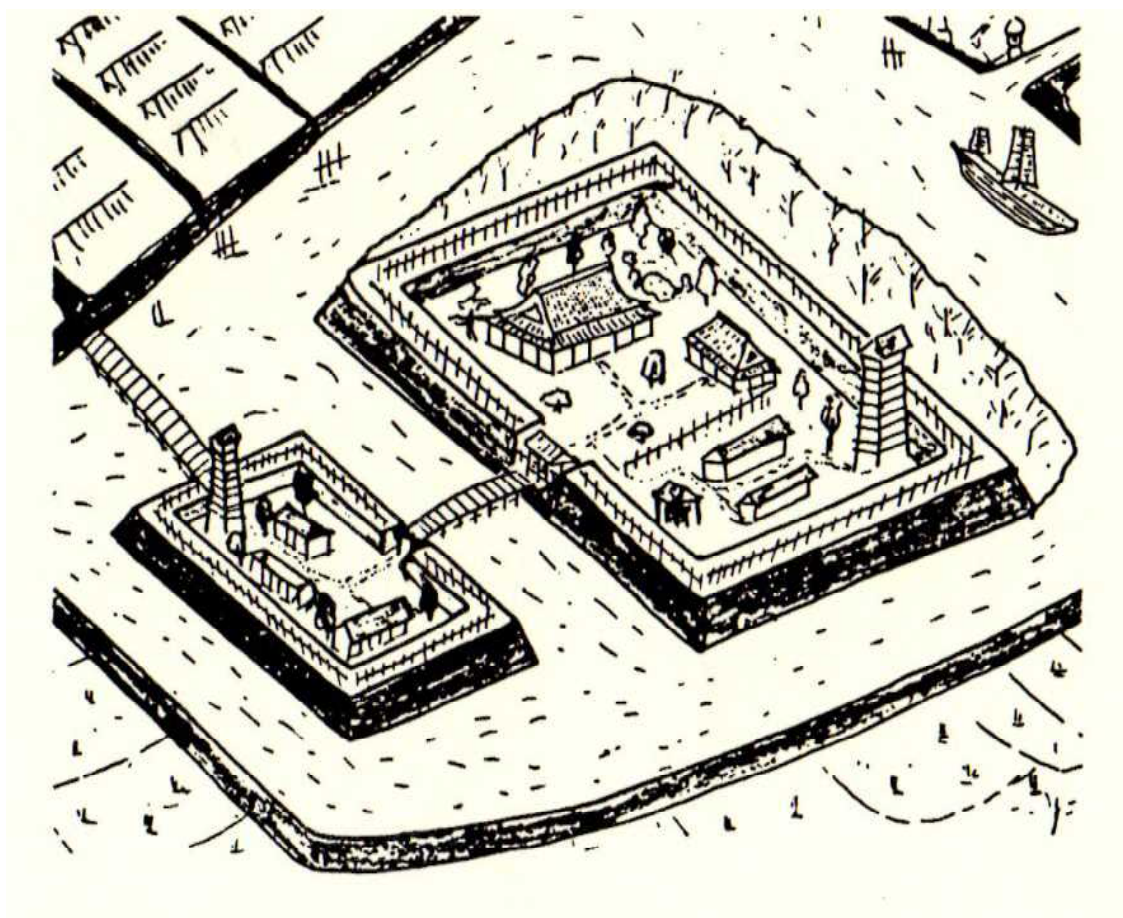


写真72：放生津城の想像図



### 13. 奥の細道

#### (1) 放生津北陸浜街道通る



写真73：松尾芭蕉(奥の細道)氷見への道を尋ねる図(蕪村描)1689年(元禄2年)

芭蕉は、滑川より浜道をたどり、富山には寄らず、常願寺川・神通川の大河を渡り、海老江を過ぎ、左辺に放生津潟を見ながら、7月14日に放生津に入ったとされています。

(現在の8/14)

1581年(天正9年)神保長住(じんぼ ながずみ)が放生津八幡宮領町、同三宮方へ市場保護の制札を発給した。

それによると、放生津八幡宮から東町の神明宮、山王町の山王社、奈呉町の気比宮の前には、市場が立ち、放生津のこの大通りの賑わいが想像されます。浜往来は、湊橋が架けられる前は、この大通りから西橋を渡って新町に出て庄川に出る浜往来が通常であったと考えられます。松尾芭蕉や伊能忠敬もこの内川を見ながら「北陸浜街道放生津」を通ったと思う。

芭蕉は、ここで氷見の田子へ行く道を住民に聞いたが「へんぴな里で、泊まる所もなかろう」と言われ、高岡へ向かい泊まる。(当時氷見地区で大火があり、災害状況から言ったのでは！)。

くろべ四十八(しじゅうはち)が瀬とかや、数しらぬ川をわたりて、那古と云浦に出。担籠(たこ)の藤浪は、春ならずとも、初秋の哀とふべきものと、人に尋れば、「是(これ)より五里いそ伝ひして、むかふの山陰にいり、蟹(あま：海女)の苦(とま)ぶき かすかなれば、蘆(あし)の一夜の宿かすものあるまじ」といひをどされて、かべ(加賀)の国に入。

わせの香(か)や分入(わけいる)右は有磯海(ありそうみ)

黒部四十八が瀬というのだろうか、数え切れないほどの川を渡って、那古という浦に出た。

「担籠(たご)の藤浪」と詠まれる歌枕の地が近いので、春ではないが初秋の雰囲気もまたいいだろう、訪ねようということで人に道を聞く。

担籠の藤浪は、(たこのふじなみ)富山県氷見市下田子田子浦藤波神社にあった藤の名所あり、万葉集の、「多胡のうらの底さへ匂ふ藤なみをかざして行ん見ぬ人のため」(人丸『拾遺集』)と「藤波の影成す海の 底清みしづく石をも珠とぞ吾が見る」(大友家持『万葉集』)の歌枕に出てくることから行こうとしたが、旧暦7月のこととともう藤は季節はずれであった。

「ここから五里、磯伝いに進み、向こうの山陰に入ったところです。漁師の苫屋もあまり無いところだから、「葦のかりねの一夜ゆえ」と古歌にあるような、一夜の宿さえ泊めてくれる人はいないでしょう」と脅かされて、加賀の国に入る。

## (2)「早稲の香や分入右は有磯海」を再解説

北陸の豊かな早稲の香りに包まれて加賀の国に入っていくと、右側には歌枕として知られる「有磯海」が広がっている。

「奥の細道」の旅も後半です。芭蕉と曾良は黒部川の支流を渡り、北陸の豊かな稲の香りに包まれて加賀の国へと入っていきます。

黒部川はその下流では幾筋にもわかれ日本海に注ぎ込みます。これを「黒部四十八が瀬」といい芭蕉と曾良は、その中を川を渡り渡り、進んでいきます。

担籠は富山県氷見にある藤の名所として知られる歌枕の地で、藤ですから、本来春に来るべきところですが、季節は初秋でした。

「しかし、初秋の情緒もまたいいものでしょう。どう行けばいいでしょうか」

芭蕉は宿の主人に尋ねます。宿の主人はいきな答えを返します。

「これより五里磯伝いして向うの山陰に入り、葦のとまぶきかすかなれば、葦の一夜の宿かすものあるまじ」

「ここから五里磯伝いに進んでいくと、人のすまいもまばらですから、一夜の宿を貸してくれる者もないでしょう」

「葦の一夜」は「一節」を「一夜」に掛けています。葦の節と節の間を「よ」と言いますが和歌ではこれが、とても短いものとされます。

そこから転じて「夜」「短い夜」という意味になります。

百人一首に採られた皇嘉門院別当(こうかもんいんのべつとう)は、平安時代末期の女流歌人の歌があります。

「難波江の蘆(あし)のかりねのひとよゆゑ 身を尽くしてや恋ひわたるべき」

難波江の葦(あし・よし)の刈根の一節のような、そんな短い旅の一夜を貴方と過ごしただけですのに、そのために、こんなにも身を尽くして貴方を恋い続けなければいけないのですか。

古い歌をふまえて、なかなか粋な機転のきいたことを言ったわけです。

そしてがさがさ、がさがさ、むせるような早稲の香りの中を進んでいくと、ぱあっと視界が開けて、海が広がって見えました。

### 早稲の香や分入右は有磯海

北陸の豊かな早稲の香りに包まれて加賀の国に入っていくと、右側には歌枕として知られる「有磯海」が広がっている。

かつて万葉歌人の大伴家持が、弟書持(ふみもち)が亡くなった時に詠みました。

「かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波も見せましものを」

…こんなことになるとわかっていれば、北陸の荒波が磯に打ち付ける波も、見せてやればよかったのに。

弟の死を悼み、生前、北陸につれて行ってやれなかったと嘆いている歌です。そして大伴家持がこの歌を詠んだ段階では、「荒磯海」は単なる荒波の打ち寄せる磯のことでした。

大伴家持のこの歌が有名になったために、以後、このあたりの海を「荒磯海」「有磯海」と言うようになったのです。つまり、歌から発生した歌枕です。もともと場所があってそれに歌がつけられたのではないんです。

## 14. 新湊のむかしばなし：海を渡った十一面観音

### (1) 海を渡った十一面観音

昔、放生津に「四朗右衛門」という船乗りがいました。

若い頃から、日本海の荒波を乗り越えて、北海道通いの商いに励んでいました。

船から上がっているときは、朝早く、海岸お歩いて八幡宮をお参りして、航海の安全と商売繁盛をお祈りし、穏やかな毎日に感謝するという信心の熱い生活を送っていました。

ある晩のこと。四朗右衛門の夢枕に、後光を放って紫色の雲に乗った「十一面観音様」がお立ちになり、「四朗右衛門よ。なんじのお迎えを待っているぞ」とお告げになりました。

寒い冬がすぎ、雪解けの3月になりました。冬の間、放生津の内川に休んでいた船は、山形県酒田の善宝寺さんのお守り札を船棚にまつつて、越中の米を船いっぱい積んで出帆(しゅっぱん)しました。

日頃信仰している八幡宮の沖で御神酒を海にささげ、船を3回まわして航海の安全をお祈りしてから北海道へ向かいました。

昼は、雪に輝く立山連峰を眺め、夜は星を仰ぎ、順風に恵まれて佐渡の小木の港に着きました。小木の町を歩いていると、なんと去年夢枕にお立ちになった観音様が、荘厳なお顔で光輝いでおいでになるではありませんか。感動した四朗右衛門は早速この観音様を買い求め、北海道帰りに受け取りことを約束しました。



写真74：廻船と十一面観音

北海道での商売は、順調に進み、四朗右衛門は、干し魚・塩魚・昆布などを摘んで、小木の港に着いたのは、海の穏やかな5月の初め頃でした。

こんな乱雑な船の中に、あの尊い観音様緒お迎えしてよいのだろうか。四朗右衛門は、あれこれと考えた末、もう一度放生津に帰り、船を整えてから日をあらためてお迎えすることを店の主人に伝えて、小木の港を出帆(しゅっぱん)しました。



港を出て間もなく、今まで天気もよく穏やかだった海が、急に荒れ出してひどい嵐になりました。しかたなく、小木の港に引き返して嵐のやむのを待ちました。

今まで長い船乗り生活の中でも、体験したこともない大きな嵐に出会ったのは、あの観音様を船にお迎えしなかったことが原因ではないかと思いました。

そこで、店の主人と相談して観音様を船にお迎えしたところ、不思議にも大きな嵐が急におさまり、のどかな春の海に戻ったのです。船乗り全員おどろいて、思わず観音様に合掌したのです。その後は、穏やかな海を滑るように進み、放生津の春祭りまでに無事に帰ることができました。

四朗右衛門は、この観音様を放生津中町に「小さなほこら」を建てて安置して朝夕にお参りました。それからというもの、いくたびの「しけ」には必ず、観音様が現れてお守りくださったので、四朗右衛門は幸せな一生を送ることができましたとさ

※註

「板子一枚この世の地獄」と言われ、海に対する信仰・俗信(ぞくしん)も多種であります。信仰心もあつく安全を祈ることが重要であった。放生津中町では、「十一面観世音菩薩奉賛会」が結成されています。

## 15. まとめ

今回「放生津小学校」から「内川の話を」との依頼があり、自分の育った地区でもあり、少し情報収集させていただきました。

しかし、調査して感じたことは、内川と言っても奈呉の浦・越の潟・放生津潟・堀切・北陸浜街道・放生津潟や内川の支川・漁業・海運・橋・水質浄化施設等多くのことが関係していることがわかりました。まさに一言では語れない状況になってしまったのです。とても範囲が広くまとまりのない報告書になってしまいました。

内川の特徴・役割・課題としては、以下のことを思っています。

- (1) 昔の人にとっては、魚・シジミ・鳥などの生息地であり豊富な食料確保の地であった。
- (2) 強低湿地帯であり、水の流れが少ない土地であるが、自然の造形美である「潟・内川」という「神秘的な地形」を持っており、神・仏の存在を感じていたのではないか。

「米づくりと塩害」の環境下で放生津潟の排水をするため、住民総出で海岸の砂を排出したことから「堀切橋」と名付けた。

- (3) 自然な水路としての役割(水運)は商業の発展のもとになってきた。
- (4) 漁船の湊としての役割を果たして多くの交易の拠点として栄えた。

それらの利益が内川添いの町の繁栄につながり、「曳山創設山町」として現在に伝えています。

- (5) 「内川から日本海ルート」は古くから人や物が行ききする海の道であった。その時代、時代に多くの人との交流の中心地であった。そのため今でも多くの寺院・お宮さんが放生津に集中している。

- (6) 内川流域浄化施設：揚水機場・ポンプ施設等は、地元住民もよく知っていない施設ではないだろうか。国土交通省・富山県・射水市の職員の皆さんが日夜「内川浄化事業」として黒子役をなされていることを。

また、今後の対策としては、内川の流量や流速を増加させることが現状で最優先される部だろうが、非常時の海からの対策も必要なことから専門的な研究成果を期待したい。

- (7) 内川周辺の草を刈りゴミを収集する。現在一番求められています。

なぜならば、内川を知ってもらい「関心を高める」ことが重要です。

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

- 国土交通省北陸地方整備局資料
- 富山県土木部河川課資料
- 射水市資料
  - 「堀岡郷土史」堀岡連合自治会
  - 「富山新港史」新湊市
  - 「見る新湊近代百年小史」新湊市役所
  - 「新湊市史」新湊市史編さん委員会
  - 「新湊市制施行20年」記念誌
  - 「いみず」の神社・寺院」射水地区広域事務組合
  - 「新湊のむかしばなし」新湊市教育委員会
  - 「地図にはない湖水」竹脇久雄(文芸社)
  - 「射水商工会議所HP」〒934-0011 魅力発信プロジェクト引用
  - 「放生津城を掘る」：久々忠義
  - 「新湊のむかしばなし」(昭和56年新湊市教育委員会)
  - 「コトバンク」(NET：PC)：フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』
  - 「能登通船船頭：加治基成・姫野 稔」聞き取り。
  - 「富山県立大学」2011年(平成23年)「海水と浄化用水が複雑に交錯(こうさく)する

内川の水環境に関する基礎的研究」

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jscejhe/67/4/67\\_4\\_1\\_1663/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jscejhe/67/4/67_4_1_1663/_pdf)

石黒信由の概要

石黒信由(1760～1836)は、越中国高木村(射水市高木)出身で、江戸時代後期の算学家・測量家である。23歳から算学を学び、43歳の時、全国を測量中であった伊能忠敬が放生津を訪れた際、教えを受け測量にも同行している。これらの知識をもって、加賀藩の測量・絵図作成の用務を勤めた。その測量精度は極めて高く、伊能忠敬の地図におとらない正確なものである。信由は測量成果を新田開発や河川・用水修築等にも活かし、地域の発展に尽くした。

国土交通省 北陸整備局(富山県)大門出張所

〒939-0234 射水市二口(大門)2546 TEL0766-52-1573

所長：千財所長／荻野係長 10/12(月)朝9:00電話連絡

聞き取り議題：内川流域揚水機状について

調査メモ

富山県7大河川の呼び名(覚え方)

おや ・しょ・じん ・じょう ・はや ・かた ・くろ

小矢部川・庄川・神通川・常願寺川・早月川・片貝川・黒部川